
その花の名前

すみかわすみか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その花の名前

【NZコード】

N04170

【作者名】

すみかわすみか

【あらすじ】

桔梗、かごめ、りん、そして殺生丸と犬夜叉。それぞれの思いを、花になぞらえて綴ります。

桔梗の章（前書き）

原作設定ですが、連載途中に書いたものですので、その後の展開とは矛盾するところもあるかと思いますが、ご了承ください。

それは予期せぬ再会だった。

だが桔梗は、何故だかあの時の少女に何かしら縁があるような気がしていたし、さらには、出来るならもう一度逢いたいと願つていたのだった。ただ、その機会がこのように早く訪れようとは思つてもいなかつたのだが——

死人となつてからは、触れ合つ人々に情を移さぬよう、必要以上のかかわりを持たぬようにしてきた桔梗にとって、それは説明のつかない感情だった。

生あるものへの執着……

それは、想いは違えど、今なお彼女の心を占めてやまない、二人の半妖にのみ注がれていた感情だった。

その少女は群生する紫の花の中で、何やら頬を口ずさみながら人待ち顔でそこに居た。

真面目な顔で花を摘んでいたかと思うと、何かを思い出したのか、時折り表情をほころばせてはあどけなく微笑む。

傍らには、双頭の妖龍が座しているとはいえ、つい先日、さらわれたばかりだというのに無用な……と、桔梗は少女の連れに対して眉をひそめた。

あの時少女がついて行つた妖怪。あれがおそらく、犬夜叉の兄、殺生丸だ。

半妖の弟を忌み嫌つていたはずの当人が、人間の子どもを連れ歩いているというのは、妖にかかる者としては、よく聞く噂であつた。ましてや、彼らの父もまた人間の娘を妻としていたのだから……ふと、桔梗は自分がこの少女にもう一度逢いたいと思つたわけがわかつたような気がした。

短い間ではあつたけれど、半妖の少年に恋をしていた自分を思い出した。

——わたしもあんなふうに、誰かを待つことが、あつた。本当に短かつた、誰かを信じて待つという幸せな時間——

「巫女さま！」

桔梗に気がついて先に声をかけたのは、少女の方だった。少女の方に歩み寄るうとした桔梗は、彼女の周りの空気に自らを拒絶されるような抵抗を覚えた。

「結界か」

知らず声に出すと、中の少女は屈託のない笑顔を向けて、こう返した。

「殺生丸さまがね、ここから出でちゃいけないって。でも、巫女さまは悪い人じやないからいいよね」

言い終わらないうちに、中から出てきた少女は、桔梗を見上げてにつこりと笑つた。

「あの時は助けてくれてありがとう、巫女さま。りん、また逢えて嬉しいな」

「りん、と言うのか？」

りんは頷いてその場に腰を下ろす。桔梗もならつて、隣に座つた。「連れを待つているのか？」

「うん、今日は邪見さまも一緒にお出かけだから、阿吽と一緒にでね……あ、阿吽っていうのはあそこにいる童で、とっても強くて優しいの」

話相手が欲しかったのだらう、りんは嬉しそうに話し始めた。

「いつもこうやって一人で居るのか？」

親は？ 家は？ と尋ねようとして、桔梗は口をつぐんだ。

この子は、望んで妖怪と共にいるのだ。

それは、じの前から見ている彼女の様子から容易にうかがい知ることができる。当の殺生丸も、彼女を大切に庇護していることは想像にたやすい。だから、そのようなこと詮索しても意味がないではないか。

桔梗は、何かまぶしいものを見るような面持ちでりんに見入った。心穏やかに妖怪と共に居るりんを見ていると、気持ちが和んだ。——じのように柔らかな気持ちになれたのは、どれくらいぶりだろう?

もしかしたら、まだ生きていた頃、犬夜叉との未来を夢見ていた頃以来かもしれないと桔梗は思う。土くれでできた自分に心というものがあるのなら、その乾きに恵みの水が沁み込むようだ……桔梗は喜んで、りんの話し相手になった。

同じ境遇でありながら、かごめを見るたびにその心はひび割れ、乾いていたのに——

邪見の話、殺生丸の話、彼らとの日常の話、昨日見た綺麗な花の話、今日の朝食べた木の実の話……りんの他愛もない話に、桔梗は優しく耳を傾け、りんもまた、思いがけず素敵な聞き手に出会い、この上なく満ち足りた気分だった。

「……殺生丸さまね、いつもちゃんとりんの渡したお花を受け取ってくれるんだけど、そのあとお花をどうしてるのが、わからないの……ねえ、巫女さま、このお花なんて言うのかな？ 殺生丸さま気に入るんじゃないかなあって思つんだ」

りんは、手に持っていた紫色の花を差し出した。
たあやかに、りんの手に包まれているそれを、桔梗は懐かしむよう見えた。

その花の向こうで笑うりんの顔が、無くしてしまった自分のそれと重なるような錯覚を覚える。桔梗は、りんの問いかには答えずこう

言った。

「ひとつ……話をしてやろうか？」

りんは顔を輝かせた。

「ほんとう？ 巫女さまがお話してくれるのは？」

桔梗は優しく微笑んで話を始めた。

その微笑みは、頑是無い幼いりんの胸をさえ締め付けるような、

優い笑みだった。

「昔……そうだな、昔といつても今から五十年前のことだが、

靈力の高い巫女が居た」

「……巫女さまみたいに？」

桔梗は曖昧に微笑んだ。

その笑みを見ると、りんはなぜだか胸が痛くなるのだった。

「その靈力の高さ故に、滅すべき妖はもちろん、里の人々にさえ心の弱さを見せることができずについた……わかるか？」

りんはこくんと頷いた。

「誰の前でも、強い巫女で居なきゃいけなかつたんだね」

りんは、以前自分の村に居た巫女のことを思い出した。なんだか近寄り難くて、気軽に話しかけちゃいけないような気がしたつけ――

「そうだ。だけど、その巫女は本当は寂しくて……そうだ、寂しかつた」

桔梗は同じ言葉を繰り返す。

「おどうや、おつかあは？」

「妹が一人……だが、妹にとつても彼女は姉である前に尊敬する“巫女”であったから」

りんは黒い瞳でじっと桔梗を見上げた。

「けれど、そんなある日、巫女はある半妖に出会いつて、恋をした」

りんはぱっと目を輝かせる。

「恋？ そのひとを好きになつたの？ 半妖つて、えつと犬夜叉さんみたいな？ あ、犬夜叉さんつて

「うのはね、殺生丸さまのおとつとで、えつと、半妖なの。で、それで、どうなつたの？」

桔梗の瞳にかすかに動搖が映るのに、りんは気付かない。

「彼と話し、接することで巫女の心は癒された。彼女にとつては、唯一の安らぎだった。だが、それは巫女の靈力を衰えさせ、結果、妖怪がその地にはびこることとなつた」

輝いていたりんの目に翳りが落ちた。

「彼女は思った。ただの女になりたい。そして、その半妖と幸せになりたい。だが、その思いは叶わなかつた。巫女は結局、ほかの妖怪の因縁の中で命を落とした……」

幼い子どもに聞かせるには、残酷な結末であると想つ。だが、りんにわかつて欲しいと思う自分がいる。

わかつて欲しい……何を？

何を、私はこの子に伝えようとしているのだ？

「長い時間がすぎて、巫女は再びこの世に甦つた。もひろん、以前と同じではなく、死人として甦らせたのだが……」

りんも、甦つたんだよ。でも、りんの時とは何かが違うんだ。きっと……

りんは、その事については触れてはいけないような気がしたので黙つていた。

「そして、恋しかつたその半妖にも、また逢うことができたのだが、昔の因縁のせいで敵同士のようになつてしまつたのさ」

話に、結論などなかつた。

ただ桔梗は、りんに語りたかつた。彼女なら、何かを受け取つてくれる感じで……そう、桔梗はりんに甘えていたのかもしけなかつた。

「でも……また好きだつた人に会えて、よかつたよね」

りんは、涙を拭つた。

「……そうだな。」

桔梗は胸にこみ上げてくるものを必死で堪えた。

声の震えを、懸命に抑えた。

「また逢えて……嬉しかった筈だ。なのに、その巫女は一度も……
逢いたかったと告げられずに……」

泣き出してしまいそうだった。

声を上げて泣けたなら、どんなに楽だらう。

「りんも、りんもね、おとうやおつかあにはもう逢えなかつたけど……
でも生き返つて、殺生丸さまにまた逢えたの。ほんとうに、ほんとうに嬉しかったよ。だから——」

「……生き返つた?」

「うん、殺生丸さまが不思議な刀でね、一度死んだりんを生き返ら
せてくれたの」

聞いたことがある。

殺生丸が持つという、癒しの刀。

波が打つように、静かな安堵感が桔梗の胸に押し寄せた。

——ああ、大丈夫だ。

桔梗は、自分の涙を拭う、小さな手を握り締めた。

この子は幸せになれる。

きっと、幸せになれる……

いつになく静かに、それでいて噛み締めるよつて語る、りんの話を殺生丸もまた静かに聞き入った。それは、眠る前に、殺生丸の留守中にあつたことを彼に話して聞かせる、りんの日課であり、今日のそれは、彼にとつて他愛も無い、むしろ愚かな、巫女の恋情だった。

そう、取るにたらない類の話の、筈だつた。

突きつけられた感傷に苛立つ殺生丸に、りんはしおかけた紫の

花を示した。

「そうだ、この花の名前、結局聞けなかつたな」

「桔梗」

殺生丸は呟いた。

「桔梗だ」

その花は、何故だか殺生丸にかの巫女を彷彿とさせたのでつた。

この時代の秋は、色が鮮烈だとかごめは思つ。

気温が下がつて、空気がより澄み切つてくるからだろうか。高い空の青さと相まって、夏から変わらない常緑の葉はもとより、落ちた葉の赤や黄色、熟した木の実に至るまで、新緑の頃とはまた違う鮮やかさが田の奥に残る。

そして花の色。

彼岸花の赤と……それから、やけに紫の花が目立つ。

それは美しい景色のはずなのに、見慣れない鮮やかさが田に痛い。此処には望んでいるはずなのに、その痛みが自分をこの世界の異邦人にさせる。

遠い目でどこか彼方をぼんやりと見て いる犬夜叉

ふたりの世界に割り込んできたのは、あたしなのかかもしれない。彼の遠い視線は、かごめを頼りなくさせる。しかし彼は、何度繰り返しても、そんな居心地悪さに気づいてくれることはなくて

かごめは腕いっぱいにコスモスを抱えていた。

井戸からあちらの世界に戻る時、境内の隅に咲き乱れているのを見つけて、持つてきてしまったのだ。

これまでも自分の生活の身の回り品を随分と戦国時代に持ち込んだがごめだったが、植物を持ち込んだことはなかつた。

なんだっけ？ 生態系？

もし種がこぼれて繁殖でもしたら、その時代に存在しなかつたはずのものがばびこことになつてしまつ。

コスモスが日本に上陸したのは明治時代だと聞いている。だから氣をつけていたのだが、なんとなく寂しくて、風に揺れるコスモスが優しくて、摘んできてしまつたのだ。

あの原色の世界では、淡い色のこの花は、やはり異邦人であると知りながら。

井戸から降り立つたかごめは、やはりやめておけばよかつたと即座に後悔した。

この世界に存在しないその花は、自分の居心地の悪さをより増長するようだつた。

すれ違う村人が、かごめを知る者も知らない者も……そして楓や珊瑚もやはり、奇異の目でその花を見る。

「綺麗だけど……変わった花だね」

珊瑚は正直にその感想を口にしたが、もちろん彼女が悪いわけではない。

生きる時代が違えば、いろいろな物の見方が変わって当然なのだ。それは、自分が身をもつて経験してきたことなのに、かごめはやはり傷つかずにはいられなかつた。かといって、不用意に捨て置くこともできない。

何よりも自分の寂しさを紛らわすために摘んできたこの花を、そんなんふうに扱うのは嫌だつた。

「わあ！　きれい！」

目を大きく見開いて、その感嘆の言葉を発したのは、りんだつた。りんが琥珀に殺されそうになつた時に、かごめは初めて殺生丸がりんという女の子を連れているのを

知つたのだが、その後何度目かの、彼女の来訪のことだつた。

「かごめさん、これ、なんていう花なの？」

りんは無邪気に尋ねた。

「コスモス……じゃなくて、秋桜っていうの」

りんの心から感嘆する笑顔に助けられ、かごめは少し笑つてみせた。

落ち込んでいた自分の居場所を、ぽんと呈示してくれたのは、り

んだった。

ここに居たらしいよ。

そんなふうに告げられた思いがした。

「なんか、不思議な色だねえ」

りんは、その花びらを陽の光に透かしてみた。

「おひさまが透けそうだね」

彼女の幸せそうな笑顔に、かごめはもう一度つられて笑った。さつきよりも、ずっと楽に笑えた気がする。

「あ……」

かごめと向き合っていたりんは、急に何かを思い出したように手を打ち合わせた。

「わかった！ かごめさんと似てるんだ！」

「え？」

少し嫌ながんじがした。

繕われていた心に、ほこりびが生じたような感じがした。

「あのね、この前、りんが会った巫女さまとかごめさんがよく似てるの」

何も知らないりんの話に、ほこりびが少しずつ広がって行く。かごめは、味気なくその感覚を反芻するしかなかつた。

「りんちゃん、よかつたらこの花あげるよ」

何か言わなくちゃと思い、それでいてこの話は続けたくないと思いい……かごめは言った。

「いいの？ でも、かごめさんの大事なものじゃないの？」

この子は、何故こうもあたしの気持ちを搖さぶるんだろう。大事なものと言われて、かごめは少なからず動搖した。

この時代で、この世界で、自分と同じ異質な花。でも、でもこの子なら……

「持つていつていよい。でもね、絶対に種がこぼれたり、根付いた

りしないように」……それだけ、約束守ってくれる?」

かごめは、のぞきこむようにりんを見て言った。

「りんちゃんが手に持つて眺めるだけ。いい?」

りんもまた、真面目な顔で頷いた。

「種をこぼしたり、根付けたりしたらだめなんだね。わかった。でも、どうして?」

「この花はね。」

かごめは言つた。

「ここでは、咲いてぢやいけない花なの」

それだけ言うのが、言つてしまふのが、とても辛かつた。

「あたしの住んでる国ではね、秋になるとこの花がいっぱい咲くんだ。でもね、このでは駄目なの」

犬夜叉……

「こつとき、こつして咲くことができても、この国の花ではないの迎えに来て。迎えに来てよ……

りんは思つた。

どうして、巫女さまも、かごめさんもこんなに寂しそうな顔をするんだろう?

自分だって、もういない、おとづやおつかあのことを考へると寂しくなるけれど、でもそれはきっと、一人にこんな顔をさせる気持ちとは別のものなんだと、りんは心のどこかで悟つた。

じゃあ、あたしもこんなふうに寂しくなることがあるのかな?途端に、りんの胸に熱いものがこみ上げた。

「殺生丸さま」

熱いものは、涙だつた。

りんはぽろぽろと涙を零した。そして、何故だかわからないけれ

ど、殺生丸の名前が涙と一緒に溢れて来る。

「殺生丸さま」

無性に、彼に会いたくなつた。

今まで、容易に信じて待つことができた彼の帰着が急に儻いものに感じられ、不安で仕方なかつた。

かごめは、泣き出したりんの手に秋桜の束をそつと握らせた。自分の中の何かがりんに殺生丸を思い出させ、泣かせてしまったことを心中で詫びながら

秋桜

風に揺れて

何思つ

小菊の章

野の花を摘んだのは誰？

殺生丸は、足元に咲いていた花をふと手折った。

これまで、この世に花が咲いているということすら意識の外だった。彼にとって花とは毒を放つ妖草でしかなく、足元で頼りなく踏み潰されてしまうような植物のことなど考えたこともなかつたのだ。

手折ったその花は、これといった香りもなく、細い花びらが黄色い芯をもつて密集していた。

今までの彼の認識で語るならば……その程度のものだつた。だが、今日の殺生丸は思つた。

花を見るりんを思い出す。
ことにその花は、つましくて小さくて、それでいてしゃんとしていて、りんに似合いだつた。

飽きもせず花を摘み、自分に手向けるその娘は、明らかに自分が今まで知らなかつた、氣にも留めなかつた世界を広げて見せる。それはりんが言うところの、きれいなものであつたり不思議なものであつたり、面白いものであつたりした。

その人間の視点と共に傾倒するほど、自分を失くしているわけではないが、りんにもたらされた新しい世界で一番始末に負えないのは、心に巢食つた、ある甘い感傷だつた。

その時、手折った花にふと影が落ち、殺生丸は何気なく空を見上げた。その空には、死魂を抱いて夢く浮遊する妖虫の群れが見えた。

甦つた死人は、死者の魂をまとつて身体を動かすと言つ。

「あの巫女か」

殺生丸は、独り声に出した。その彼の声に呼応するように、妖虫は低く舞い、彼の真上で旋回して見せる。

何故だか呼ばれているような気がして、殺生丸は妖虫に導かれるまま歩き出した。

最近、彼を苛んでいた感傷は、かの巫女と、犬夜叉と、あの人間の小娘と……くだらないはずの、その三者のあがきの中にこそ答えがあるような気がしていた。

何故だかわからない。

りんと出会つてから、何故だかわからないことが多すぎるのだ。

森の奥深く、古木の幹によりかかつて桔梗は座していた。
もうすぐ、あの妖怪が此処に来る。死魂虫に導かれ、大儀そうに、
それでいて無表情な冷たい眼をして。

犬夜叉の異母兄。

殺生丸。

逢わねばならない、と桔梗は思つた。どうしても確かめたいことがある。それは、あのちいさな人間の娘のためでもあり、そして半妖との恋に殉じた哀れな自分のためでもあると。

妖に恋して不幸になる女は、私だけでいい。

「白靈山以来だな」

先に口を開いたのは桔梗だった。

殺生丸は、何かつまらぬことを思い出したかのように、眉をわずかにつり上げた。

「言い遅れたが、私の名は……」

「別にお前の名など知る必要はない」

淡々と自分の言葉を遮る殺生丸に、桔梗は笑つた。

この、冷たい妖怪があまりにも自分が思つた通りなので、可笑しくなつたのだ。

「あの時の娘に、あれから会つた。懐いてくれて、いろいろと話をした」

可笑しさを口の端に飲み込んで、桔梗は言った。

「ふん……やはりお前だつたのか」

殺生丸は、桔梗に冷ややかな視線を投げた。桔梗は、静かにその視線を受け流す。

燃え盛つているのに、微塵も熱さを感じられない、この冷たい炎のようないきははどうしたことだろう。

生身の人間であつたときならば、私はこの妖気に取り込まれていたかもしれない、桔梗は思う。

犬夜叉がもつ、荒削りだけれどどこか幼さの残る妖氣と違い、彼のそれは、まさに彼そのものだつた。熱くて、冷たくて、だからこそ確かめずにはいられないような官能的な

だが、触れたら最期、その身は切り裂かれるか灼けおちるかのどちらかである。それはきっと、殺生丸にとつて指一本動かすほどに容易いことなのだろう。

「尋ねたいことがある」

桔梗は静かに言つた。

そんな凄まじい妖氣の主のもとにあつて、ちっぽけな人間の子どもである、りんが健やかなのは何故か。

桔梗はここ何日か、考えていた。

答えはすぐに出た。

だが、その答えは殺生丸本人の口から聞かねば、無意味なものだつた。

「尋ねたいことだと？ 私もお前に問いたいことがある」

殺生丸の返答は桔梗にとつて意外だった。きっと、口の端で嘲笑われるか、無表情で返されるかのどちらかだと思っていたのである。

「前置きはいらぬ

殺生丸は言つた。

「死人のおまえが、そのような浅ましい姿で現世をうろついているのは、あの半妖のためか」

单刀直入だつた。その問い合わせの潔さに、桔梗はかえつて救われたと思う。

「答える

殺生丸は抜き身の刃を桔梗の目前に突きつけた。

その刃は、妖が持つにしては不思議な気を放つていた。これが話に聞く天生牙に違いない。

「死人の私にこの刃を向けるなど、ずいぶんな皮肉だと思わないか？」

桔梗は軽口を叩いた。だが、その口は笑つていなかつた。

「答えると言つている

「そうだ。奈楽を追うのも、結局は犬夜叉と私の因縁のため」

「……くだらん

殺生丸は唇の端で呟いた。

苛立ちが彼を支配する。

くだらない、取るに足らぬ感傷だとわかつていて、何故自分は確かめてしまつたのだろう。不愉快になることがわかつていて何故。感情とは、殺生丸にとって容易に御すことのできるものだつた。感情や感傷に左右されるのは愚かな輩だと思っていた。そう、あの半妖の弟のように。

だから殺生丸は苛立つていた。

感情というものに翻弄されている自分が許せなかつた。

「では、今度は私の問い合わせに答えてもらいつ

桔梗は、冷たく燃える金の瞳に言った。

彼の苛立ちは桔梗にも伝わってくる。その姿は、今まで話に聞いていた殺生丸の姿とは異なるものだった。

冷酷にして無常、強大な妖力をもつ孤高の大妖怪。それは間違つてはいないうだろ。だが、今自分の目の前にいるのは、己の感情を持つて余した若輩だった。

それもまた、殺生丸に違ひなく

「あの娘……りんのことを

桔梗は小さく息をついた。

「愛しく思つてゐるのか？」

途端、殺生丸から、総毛立つようなすさまじい妖気が発せられた。彼の格気に触れたことは間違ひなさそうだった。だが、桔梗はひるまずに一点を見据えた。

死人の身。妖気の何を恐れるというのか。

桔梗は、殺生丸の目をただ見据えた。

この私を恐れるどころか、挑戦的に睨み返してくるこの女。

そんなことができるの、妖怪である私を恐れない人間の女は、この巫女と、あの小娘と……

・・・りん。

目を伏せた殺生丸の脳裏に、あの花が浮かぶ。

黄色い花弁。

白くて細い花びら。

細い茎をしゃんと伸ばし。

今までに幾度か問われたことがある。

「あの娘はおまえの何だ？」

「どうして人間の娘を連れている？」

だが、

「愛しいか」だと？

殺生丸から凄まじい妖氣が消えた。そこに居るのはただ、毒氣を抜かれた若い妖怪。

「そのような言葉は私の範疇にはない」

殺生丸は意外なほどに穏やかな表情で言った。

「では、」

もう、十分な気もしたが、桔梗はなおも食い下がった。

「ただ、私ならば大切なものを死なせるようなことはせぬ」

殺生丸は意味有り気に、話を結んだ。

もう、死人の巫女などに用はなかつた。
先ほどまでの苛立ちの波も消えていた。

帰ろう。

殺生丸は踵を返した。

りんが自分を待ちわびているだろ？……

「幸せに

桔梗は言った。

摘んでしまつた野の花は、もつ野辺には戻せない。

その手のひらの中で、短い命を慈しんで咲かせてやるよ？……

そんなふうに幸せになつて欲しいと、桔梗は願つた。

眼下の崖下に、瘴気が渦巻いて「うう」と流れている。生きとし生けるもののすべてを飲み込んで溶かしてしまったような、禍々しい氣の流れだった。そして殺生丸は、かの巫女が落ちて行ったその渦に背を向けて歩き出した。

「待ちやがれ、殺生丸！」

犬夜叉だった。

「てめえ……黙つて見ていたのか。桔梗が殺されるのを……」

犬夜叉は、鬱陶しくも見当違ひな激情を、自分にぶつけて来る。

桔梗……

殺生丸は、いつぞやりんが紫の花を摘んできたことを思い出した。奈楽に打たれ、瘴気に落ちていった巫女。

「桔梗とやらを殺したのは奈楽だ。そして……それを助けられなかつたのは、犬夜叉、お前だ」

歩き出した殺生丸の背に、自分を責め、女を悼む犬夜叉の慟哭はまだ伝わってくる。

馬鹿が。

殺生丸は、吐き捨てるように呟いた。

私が助けて、何の意味がある。

あっけなく、奈楽の懷へ落ちて行つた桔梗。

他でもない、お前が助けねば……

それは静かな怒りだった。

我なら……我ならば。

野の花を摘んだのは誰？

小菊の章（後書き）

三部作、完結です。更新が遅くなり申し訳ありませんでした。
かなり前に書いたもので恐縮ですが……

連載も終わり、かなりの時間がたちました。連載中に書いたものゆえ、最終的に見ると矛盾もあるつかと思いますが、同好の多くの方に可愛がっていただいた作品です。やっぱり今でも殺生丸とりんが好きです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0417o/>

その花の名前

2011年3月4日15時10分発行